

附属浜松小学校が保管する二つの石碑が物語る歴史的エピソード：
井上靖が在学した浜松師範学校附属小学校

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 保寿 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006513

附属浜松小学校が保管する二つの石碑が物語る歴史的エピソード

—井上靖が在学した浜松師範学校附属小学校—

Consideration on Episodes of Two Monuments Kept by the Hamamatsu Elementary School Attached to the Department of Education : Focusing Elementary School Attached to the Hamamatsu Normal School Where Yasushi Inoue Was Registered

山 崎 保 寿

Yasutoshi YAMAZAKI

（平成 23 年 10 月 6 日受理）

The purpose of this paper is to clarify the origin of two monuments kept by the Hamamatsu elementary school attached to Shizuoka University, and to investigate episodes of these monuments. The following matters became clear upon investigation. (1)The first monument was erected at the first graduation ceremony of Hamamatsu normal school in March, 1917. At that ceremony, the "Song of the Graduation Ceremony" was sung for the first time. This song has been sung at the elementary school graduation ceremonies ever since. (2)The second monument was placed in March, 1921. Famous Japanese novelist, Yasushi Inoue, studied in the elementary school from April, 1920 to March, 1921. (3)Yasushi Inoue has multiple autobiographies. However, he doesn't mention the elementary school in any of them. His registration at the elementary school attached to the Hamamatsu normal school is also overlooked in the publication which Hamamatsu citizens read.

1 はじめに

静岡大学教育学部附属浜松小学校は、その前身である浜松師範学校附属小学校の時代も含め、平成23年（卯年）で95年の歴史をもっている。前身の浜松師範学校附属小学校が開設されたのは、大正5（1916）年4月である。現在の附属浜松小学校校長室に掲示されている「静岡大学教育学部附属浜松小学校沿革」等に基づくと、浜松師範学校附属小学校校長は、浜松師範学校の校長が兼ねており、開設時が津久井徳次郎（在任期間：1916年3月～1921年1月）、次の校長が佐々木松蔵（在任期間：1921年1月～1931年3月）である。現在の附属浜松小学校の母体である静岡県立の浜松師範学校が開設されたのは、前年の大正4（1915）年4月である⁽¹⁾。大正4（1915）年の静岡県浜松師範学校開設については、前年の大正3（1914）年3月に静岡県浜松師範学校として設立認可がなされ、本科第一部（4年制）と講習科（2年制）が設置された。浜松師範学校附属小学校が開設されたのは、浜松師範学校開設の1年後になる。その後、講習科は、大正12（1923）年に廃止され、それに伴い、本科に中学校（旧制）卒業生を対象とした1年制の第二部が開設されている。当時の名残を示すものとして、全寮制であった浜松師

範学校寮歌⁽²⁾がある。浜松師範学校寮歌は、第1番から第7番までがあり、その第3番には、「大正四年春四月 いしずえ固く 据えしより 覇業の歴史 積みなして 春は香る 健児の 舎」と歌われている。歌詞からは、大正4（1915）年開校当時の意気込みを知ることができる。

静岡県浜松師範学校は、昭和18（1943）年4月に師範教育令の改正⁽³⁾により、官立に移管され、静岡第二師範学校となった。そして、静岡第二師範学校は、昭和24（1949）年に静岡第一師範学校および静岡青年師範学校とともに包括され、新制の静岡大学教育学部として発足した。このとき、静岡第二師範学校は、静岡大学教育学部浜松分校という形で校舎が継続使用され、昭和40（1965）年3月まで同地で教員養成を担当することになった。昭和40年4月に、静岡大学教育学部浜松分校は、静岡市の教育学部に統合された⁽⁴⁾。また、静岡第二師範学校は、最終学年の卒業生が出る昭和26年3月まで包括学校として存続した。こうした変遷を経る中で、附属浜松小学校の校名も師範学校等の制度改変に伴い、浜松師範学校附属小学校⁽⁵⁾（大正5年～）、浜松師範学校附属国民学校（昭和16年～）、静岡第二師範学校附属国民学校（昭和18年～）、静岡第二師範学校附属小学校（昭和22年～）、静岡大学静岡第二師範学校附属小学校（昭和24年～）、静岡大学教育学部附属浜松小学校（昭和26年～）と変更されている⁽⁶⁾。静岡大学教育学部浜松分校は、現浜松市中区布橋に所在し、その跡地は現在静岡大学教育学部附属浜松小学校・中学校の校地となっている。

附属浜松小学校は、以上のような変遷を経て現在に至っており、開設期の状況として歴史的に興味深い事柄が幾つか存在する。その一つとして、附属浜松小学校には、二つの石碑が保管されているが、それらの由来については明らかにされていない。これらの石碑に関わる歴史的な事実が明らかになれば、学校の存在意義を補完することになり、スクールアイデンティティや愛校心の高揚にもつながる。そこで、本稿の課題は、第一に、現在附属浜松小学校に保管されている二つの石碑の由来を明らかにし、関連する歴史的エピソードを探ることである。第二に、石碑設置の時期と同じ頃、井上靖が附属浜松小学校の前身である浜松師範学校附属小学校で学んでいたことは必ずしも周知ではなく、その理由を考察するとともに、井上靖に関わる当時の状況を明らかにすることである。

2 二つの石碑が物語るエピソード

(1) 第一の石碑と「卒業式の歌」



(石碑:正面から見て縦60cm、横19.5cm、厚さ9cm)
(台座:正面から見て縦11cm、横35cm、奥行25cm)
(石碑縦の内3cmは台座の中)
(平成20年10月発見)

写真1. 第1の石碑(大正6年3月設置)

附属浜松小学校には、二つの石碑が保管されている。詳しい考察を後に示すように、一つの石碑は大正6（1917）年3月に、もう一つの石碑は大正10（1921）年3月に設置されたものである。以下では、前者を第一の石碑、後者を第二の石碑と呼ぶ。写真1が第一の石碑の外観である。第一の石碑は、表面に楷書体縦書き2行で、「第一回講習科卒業生 記念樹」と刻まれている。裏面には、文字等は刻まれていない。第一の石碑は、発見当初は、上下二つに割れていた。そのた

め、平成22年10月に、立体彫刻が専門の静岡大学教育学部教授登坂秀雄氏に依頼し、修復が行われた。登坂氏は、附属浜松小学校第27代校長（在任期間：2003年4月～2006年3月）である。石碑には、登坂氏によって、花崗岩の台座が付けられている。

第一の石碑発見の発端は、平成20年10月に行われた観察池の改修工事である。観察池は、附属浜松小学校校舎の西側に位置している。周囲約25m、深さ50cmほどの池である。観察池の修理を行っていた当時PTA会長山下陽平氏が、池底の沼の中から二つに割れた古い石碑を見つけた⁽⁷⁾。石碑の表面には、先の碑文が刻まれていた。

碑文が示すように、この石碑は、附属浜松小学校・中学校の敷地に所在した旧制浜松師範学校時代のもので、講習科の第一回卒業を記念して建てられたものである。浜松師範学校は、大正4（1915）年（卯年）に開設されており、4年制の本科とは別に2年制の講習科が設けられていた。講習科は、教員またはそれに準ずる資格のある者がさらに補習教育を受ける課程である。修業年数の関係から、講習科の方が早く卒業生が出たのであり、同窓会名簿に記載されている卒業年から、「第一回講習科卒業生」が出た年は大正6（1917）年である。このことから第一の石碑は大正6（1917）年に建てられたことになる。石碑には設置年月が書かれた部分がないが、後述する第二の石碑との類似性から、「記念樹」の文字の左側に設置年月が刻まれていたと考えられる。すなわち、「記念樹」の文字の左側には、講習科の第一回卒業生が出た「大正六年三月」の文字が刻まれていたことになる。

発見された石碑は、講習科の第一回卒業生が、卒業の記念として植樹を行ったことを表している⁽⁸⁾。大正6年3月の浜松師範学校講習科第一回卒業生は、29名である⁽⁹⁾。彼らがどのような樹木を植樹したかについては、平成21年6月30日に浜松公園緑地協会の協力で、樹木医が来校し校内の樹木をつぶさに調べたが、ほとんどの木が50年程度以内であり、90年以上を経ている樹木はないとのことであった。したがって、大正6（1917）年に植樹された樹木が何であったかは、現在も不明である。そこで、古を偲びつつ卒業記念として、附属浜松小学校6年生が平成22年2月24日に校舎東側にある花壇後方の場所にシダレザクラを植樹することにした⁽¹⁰⁾。同日は、附属浜松小学校・中学校同窓会副会長の齊藤行雄氏が「記念植樹」の挨拶と趣旨説明を行い、シダレザクラ1本とともに校地の境に垣根としてイヌマキ60本が植えられた。

また、附属浜松小学校では、毎年の卒業式で、「卒業式の歌」が歌い継がれている。この歌は、卒業生が歌う部分と在校生が歌う部分が組み合わされており、卒業式の中で感動が高まる場面である。「卒業式の歌」の歌詞を資料1に示す。「四方の山々霞つゝ 花咲く春のかへり来ぬ ……」で始まるこの歌は、荘厳さと躍動感を感じさせる曲の響きに魅了されて、卒業後もこの歌をくちずさむOB・OGが多いようである。

同窓会70周年記念で設置された国旗掲揚台横の石碑にある碑文より（1987年設置、すぐるの名前は碑文のまま平仮名で示した）

四方の山々霞つゝ 花咲く春のかへり来ぬ 嗚呼この春に巡り逢ひ 今日の擧を擔へるは これぞ師の恩友の援け 何時の世にかは忘るべき 行く手遙けき九十九折 如何にけはしくさがしども 訓へ身にしめ一筋に 登り極めん國のため	學びの窓の雪聲 集めし功今日なりて 輝く玉の柱をば 手折る君こそめてたけれ	今日を限りの列れかと 思へばいと名残惜し さはれ榮あるこの門出 祝はざらめや勇ましく	さらばよ さらば いざさらば	卒業式の歌 黒岩胤 佐々木すぐる 作曲 作詞
--	--	---	----------------------	------------------------------------

資料1.「卒業式の歌」の歌詞

「卒業式の歌」については、浜松師範学校の国語科教師であった黒岩胤と音楽科教師であった佐々木英が、大正6（1917）年に、第一回講習科卒業生のためにこの歌を作ったとの資料が残っている⁽¹¹⁾。したがって、これらのことから第一の石碑にまつわる興味深い事実が浮かび上がる。すなわち、「卒業式の歌」が作られた時期と、石碑に刻まれた「第一回講習科卒業生」という碑文の時期とが一致することになり、発見された第一の石碑は、「卒業式の歌」が初めて公式に歌われたときのものであることになる。まさに、資料の記述と碑文の内容が一致したのである。このように、池の底から発見された石碑と、附属浜松小学校卒業式で代々歌い継がれている「卒業式の歌」の由来との関係が明らかになった。

なお、佐々木英は、苦学して姫路師範学校と東京音楽学校を卒業し、浜松師範学校の音楽科教師として大正5（1916）年から大正11（1922）年まで6年間在職した⁽¹²⁾。その後は、作曲に専念するため東京へ出て作曲家としての道を歩んだ。佐々木英は、浜松師範学校時代に「青い鳥」の他多くの校歌を作曲し、後に「月の沙漠」「お山の杉の子」「お手々つないで」など多数の童謡を作曲した。彼は、作曲家佐々木すぐるとして世に知られ音楽教育の発展に貢献していく。「卒業式の歌」は、その後も浜松師範学校の卒業式歌として歌い継がれるとともに、附属小学校の卒業式でも定着するようになった。さらに、浜松師範学校の卒業生によって静岡県西部地方の小学校をはじめ、全国幾つかの学校に広まっていった。昭和62（1987）年に、附属浜松小学校同窓会70周年および附属浜松中学校40周年の記念行事として、「卒業式の歌」の歌詞の碑が附属浜松小学校・中学校グラウンドの南側にある国旗掲揚台のところに設置されている。

前述したように、浜松師範学校附属小学校は、大正5（1916）年に開設された。開設年の大正5（1916）年4月は、尋常科1学級、高等科1学級のみが発足であり、尋常科には希望に燃えた最初の児童たちが第4学年に入学してきた。彼らが開設時の小学校最上級生であり、卒業したのは、大正8（1919）年3月である。これが浜松師範学校附属小学校の第1回の卒業式である⁽¹³⁾。当時の児童も、卒業式の時期に隣接する浜松師範学校から聞こえてくる「卒業式の歌」の歌声や演奏を耳にしたり、自らの卒業式で歌ったりしていたことになる。浜松師範学校を源流とする「卒業式の歌」の由来と全国的な広がりを考えると、浜松師範学校が制度上廃止された現在も附属浜松小学校・中学校の卒業式で脈々と歌い継がれている「四方の山々霞みつゝ……」の響きには、実に感慨深いものがある。

以上までをまとめると、附属浜松小学校に保管されている第一の石碑は、大正6（1917）年3月に設置されたものであり、「第一回講習科卒業生 記念樹」の文字の左側に「大正六年三月」の文字が刻まれていたと考えられる。この石碑は、附属浜松小学校・中学校の卒業式で代々歌われ続けている「卒業式の歌」が最初に公式に歌われた年に設置されたものである。「卒業式の歌」は、大正6年に、浜松師範学校の国語科教師黒岩胤と音楽科教師佐々木英が、第一回講習科卒業生のために作ったものである。

(2) 第二の石碑の時期に在学した井上靖

附属浜松小学校には、もう一つの石碑が保管されている。この第二の石碑は、表面の碑文に楷書体縦書き3行で、「講習科卒業生 記念樹 大正十年三月」と刻まれている。裏面には、文字等は刻まれていない。碑文から、この石碑が大正10（1921）年3月に建てられたことが明らかである。石碑の外観を写真2に示す。この石碑は、附属浜松小学校第25代校長河鍋鬻氏（在任期間：1997年4月～2000年3月）が、平成10年8月に運動場南側隅の木々の下から発見したものである⁽¹⁴⁾。



(正面から見て縦63cm、
横30cm、厚さ7cm)
(平成10年8月発見)

写真2. 第2の石碑(大正10年3月設置)

第二の石碑は、「講習科卒業生」の文字の上側にあたる部分が割れて欠落している。しかし、第一と第二の石碑は、碑文の書き方に類似性があることから、第二の石碑においても、「講習科卒業生」という文字の上側には、第何回という文字があったものと思われる。大正6（1917）年に建てられた第一の石碑には「第一回講習科卒業生」と刻まれていることから、年数を対応させると、「大正十年三月」と刻まれた第二の石碑は、第五回講習科卒業生の石碑であることになる。したがって、第二の石碑における「講習科卒業生」という文字の上側には、「第五回」という文字が書かれていたことになる。

第二の石碑に関連することとして、大正10（1921）年前後に浜松師範学校附属小学校を卒業または在籍していた人物として、井上靖（1907年5月6日～1991年1月29日）を挙げることができる。ここで井上靖を取り上げる理由は、『あすなろ物語』や『しろばんば』などの作品が教科書に掲載されたり、静岡県立修善寺工業高等学校、静岡県立吉原工業高等学校、伊豆市立天城中学校、秋田県羽後町立羽後中学校などの学校の校歌を作詞したりしており、学校教育になじみの深い作家であるからである。さらに、彼の在学が現在必ずしも周知の事実ではないため、第二の石碑に関わる当時の状況の一つとして探求する意義があると思われるからである。

井上靖は、大正9（1920）年4月から大正10（1921）年3月まで、浜松師範学校附属小学校高等科に在学していた。井上靖の浜松師範学校附属小学校時代の状況については、藤沢全氏の著書『若き日の井上靖研究』において詳細に明らかにされている⁽¹⁵⁾。本稿において、藤沢氏の業績以上に井上靖に関する事実を示すことは困難である。しかし、井上靖が浜松師範学校附属小学校に在学していたことは、現在の附属浜松小学校関係者や浜松市周辺の一般市民の多くには知られていないため、以下ではその理由を検討したうえで、上記の先行研究著書と井上靖の作品等に依拠しつつ考察を進めることにする⁽¹⁶⁾。

ここで、以上に述べてきたことをまとめれば、附属浜松小学校に保管されている第二の石碑は、大正10（1921）年3月に設置されたものである。第一の石碑と第二の石碑の類似性から、第二の石碑の欠落している部分には、「第五回」という文字が書かれていたと考えられる。第二の石碑が設置された時期に在籍した特記すべき人物として井上靖がいる。井上靖の在学は一般的には周知ではないが、大正9（1920）年4月から大正10（1921）年3月まで、浜松師範学校附属小学校高等科で学んでいた。以下、井上靖の在学についてもう少し詳しく考察する。

3 井上靖の在学が周知ではない理由

井上靖が旧制浜松中学校（現浜松北高等学校）へ優秀な成績で入学し、旧制沼津中学校（現沼津東高等学校）へ転校したことはよく知られているが、浜松師範学校附属浜松小学校に彼が在学したことは現在必ずしも周知の事実ではない。その理由は、幾つか考えられる。

その一つは、井上靖は幾つかの自伝風小説⁽¹⁷⁾を残しており、それらの作品の中で、浜松市

への転居や旧制浜松中学校への入学については述べられているが、浜松師範学校附属小学校に関する事柄が出てこないためである。特に、井上靖自身が自伝風小説と位置づけている三部作『しろばんば』（『主婦の友』に連載1960年1月～1962年12月、後に文庫本化）、『夏草冬濤』（『産経新聞』に連載1964年9月～1965年9月、後に文庫本化）、『北の海』（『東京新聞』に連載1968年12月～1969年11月、後に文庫本化）の中では、浜松師範学校附属小学校のことが明確には述べられていない。また、『あすなろ物語』は、井上靖が、「物語は完全なフィクションである。従って、形は何となく自伝小説風であるが、自伝小説とは言えない。事実と虚構とがふんだんに入り混じっている」⁽¹⁸⁾と述べているように、フィクションであるとしても、物語中に浜松師範学校附属小学校に該当することは述べられていない。このように、自伝風小説が複数ありながら、これらの作品の中で浜松師範学校附属小学校のことに触れていないことが、井上靖の在学が周知となるに到っていない一つの理由である。

その二は、浜松市民が目にする出版物等においても、井上靖が浜松師範学校附属小学校に在学していたことが看過されていることである。例えば、平成23年に浜松市制百周年を記念して出版された『ももとせ』（2011年）では、井上靖が浜松市ゆかりの作家として紹介され、浜松尋常高等小学校（現浜松市立元城小学校）に転入し、旧制浜松中学校（現浜松北高等学校）に入学したことは記されているが、浜松師範学校附属小学校に在学したことは記されていない⁽¹⁹⁾。その背景には、浜松師範学校附属小学校にあった多くの記録資料等が、戦災により消失していることも影響しているだろう⁽²⁰⁾。

その三は、現在、毎年4月に附属浜松小学校・中学校に在職した教師の会である「あけぼの会」が、そして、毎年11月に附属浜松小学校・中学校の同窓会が開催されているが、筆者が聞いたところ、それらの会においては、井上靖がかつて浜松師範学校附属浜松小学校で在学していたことについて知る人がいないことである。さらに、それらの会で配布される名簿的資料等にも井上靖の名前が見られないことである。静岡大学教育学部附属小学校・中学校同窓会が編集発行している『会員名簿』には、大正8年3月の尋常科第1回卒業生および高等科第1回卒業生以降の卒業生が掲載されているが、その中に井上靖の氏名は見られない。このように、附属浜松小学校・中学校に在職した教師の間でも、現在の同窓会の中でも、井上靖の在学は知られていないのである。

以上のような理由により、井上靖が浜松師範学校附属小学校に在学したことは、現在の附属浜松小学校関係者や一般市民の多くには知られるに至っていないのである。

さて、井上靖の経歴に関しては、藤沢全氏の年譜⁽²¹⁾によって詳細に明らかにされている。井上靖は、軍医であった父親の転属によって何回か転校している。彼の少年時代の略歴を示すと次のようになる。井上靖は、伊豆の湯ヶ島尋常高等小学校⁽²²⁾から、大正9（1920）年2月に浜松尋常高等小学校（現浜松市立元城小学校⁽²³⁾）の第6学年に転入した。井上靖は、大正9（1920）年3月に行われた旧制浜松中学校（現浜松北高等学校）の入学試験に失敗したため、再起を期して4月に浜松師範学校附属小学校高等科へ入学した。井上靖が附属小学校に通った一年間は、「毎日のように補習授業を受け、暗くなってから家へ帰ると、夕食もそこそこにあとは自分の小さい部屋に閉じ籠もって机に向かった」、「私は今考えてみて、自分の一生で本当に真剣になった時期があるとすれば、この浜松での一年間ではなかったかと思う」⁽²⁴⁾と述べているように、難関浜松中学校への合格を目指して真剣に勉強した時期であった。同時に、浜松師範学校附属小学校に在学したこの一年間は、彼の人生の中で父母弟妹と暮らした数少ない

期間であり、両親に対する思い出が形成された時期でもあった。一年後、彼は、旧制浜松中学校の入学試験を受けて、首席で合格し、大正10（1921）年4月に旧制浜松中学校に入学する。さらに一年後の大正11（1922）年4月には、井上靖は旧制沼津中学校（現沼津東高等学校）の第2学年へ転入することになる⁽²⁵⁾。

伊豆の湯ヶ島尋常高等小学校から浜松へ越した際の転入先が、最初から浜松師範学校附属小学校ではなく、浜松尋常高等小学校（現浜松市立元城小学校）であったことは、彼の浜松師範学校附属小学校に在学していた経歴を分かりにくくしている。しかも、高等科という現在にはない制度での在籍であったことも、浜松師範学校附属小学校に在学していた事実への理解を妨げている一因であろう。これは、彼の在学が現在必ずしも周知の事実ではないことの原因その四である。

4 井上靖の浜松時代と附属小学校

(1) 浜松師範学校附属小学校に通った一年間

井上靖の代表的自伝風小説の中には、浜松師範学校附属小学校のことを書いた箇所は見られないのであるが、他の作品の中には、浜松師範学校附属小学校時代のことを書いたものが幾つか見つかる。『幼き日のこと』、『カマイタチ』、『帽子』などがそれである。

まず、『幼き日のこと』（『毎日新聞』に連載1972年9月～1973年1月、後に新潮文庫『幼き日のこと・青春放浪』1976年所収）では、「浜松の元城小学校に転校した」こと、「その年の浜松中学校の受験に失敗し、師範の付属小学校にもう一年通わなければならなかった」こと、「浜松で師範学校の付属小学校の高等科に通った。中学受験のための浪人時代とも言うべき一年間は、家族といっしょの生活だったので、私の両親に関する思い出は、その大部分のものが、この中学浪人時代から始まっている」こと、「翌年浜松中学校へ入ると、すぐ父はシベリアへ出動する部隊について大陸に」渡ったこと、「私の浜松時代は二年間であり、その間は家族といっしょの生活であったが、そのうちの一年間は、母と弟妹だけの、父親の居ない生活だった」ことなどが述べられている。これらの記述から読み取ることができるように、井上靖が過ごした浜松時代二年二ヶ月間のうち、浜松師範学校附属小学校に通った一年間は、彼の人生の中で数少ない父母と弟妹がそろった生活であったことから、彼にとって一定の意味を持った時期であったと考えられる。『幼き日のこと』については、井上靖はこの作品を「ある時期の私と私の周囲を正確に描こうとした文学的記録」⁽²⁶⁾と位置づけおり、彼の作品の中で、内容の事実性が高いものと考えられる。

次に、『カマイタチ』（『北国』東京創元社、1958年所収）では、「学校へゆく途中に犀ヶ崖という小さい古戦場」がありその谷底には、「夕暮時にカマイタチが出るというのでみなから怖れられていた」こと、「私たちは受験の予習でおそくなると、ここを通るのが怖かった」こと、「ある時、学校で若い先生がカマイタチの話を科学的に説明してくれた」ことなどが記されている。それにより、カマイタチへの「恐怖は私から消失したが、私が人生への絶望的な思惟の最初の一步を踏み出したのは、恐らくこの時なのであろう」としている。ここで、受験の予習の帰りとはい、旧制浜松中学校への再受験を目指して、浜松師範学校附属小学校高等科に通っていたことを表している。「人生への絶望的な思惟」とは、平常の生活を送っている者が不可解なカマイタチによって「いきなり鋭利な鎌で人間の頬や腿を斬」られるかもしれないという恐怖感を表していると考えられる。そうした「絶望的な思惟の最初の一步」が、受験浪人という

抑圧下で「樹木鬱蒼とした深い谷」である犀ヶ崖の横を通して附属小学校へ通う生活の中で少年の心に生じたのであろう。

なお、「人生への絶望的な思惟」の解釈については、工藤茂氏がより分析的な二つの解釈を示している⁽²⁷⁾。また、菅原五十一氏は、井上靖の『カマイタチ』を取り上げ、井上靖の詩的スタイルの特質を「視覚的な詩的イメージの形象の正確明澄さにある。さらにそのイメージがそれぞれ人生の一瞬の光芒にも似たひらめきを持っていることである」⁽²⁸⁾と指摘している。藤沢全氏は、「得体の知れない怖さがこの世に存在することを知った、その原体験となっている」、「そうした遠き日に刻んだ感覚を呼び起こし、現在の自己を確かめるように、内省の動機を秘めた叙情の紡ぎとなっている」とこの詩を評している⁽²⁹⁾。

そして、『帽子』（『潮』1966年1月号に掲載）では、郷里伊豆の小学校から浜松の小学校に転入しそこから浜松中学校の入学試験を受けたが受からなかったこと、附属小の高等科へ通い毎日のように補習授業で暗くなってから家へ帰り真剣に勉強したこと、父母も教師も郷里の小学校の学力が低いことを非難しがちであったこと、そのため、自分のためというより郷里の小学校の威信のために何としても合格したかったことなどが述べられている⁽³⁰⁾。附属小の高等科へ通い毎日のように補習授業で暗くなってから家へ帰っていた通学の様子は、『カマイタチ』に述べられている情景と一致する。こうした記述からは、当時4人に1人と言われるほど難関であった浜松中学校への合格を郷里の小学校の名誉と威信を回復するための使命のように感じて受験勉強に打ち込むものの、いつ何時、科学的には解明されているとはいえカマイタチのような不気味な作用によってその姿勢を断ち切られるかもしれないという不条理を頭の片隅で感じつつ、それでも勉強しなければならないと机に向かう少年の心をうかがうことができる。

さて、藤沢全氏の調査によれば、浜松師範学校附属小学校への「入学を許可された靖は、大正九年四月六日の入学式に出席し、初めて校長の津久井徳次郎の訓話を聞き、担任の高橋清一郎（教員間の教科研究では算数の主任）」を知った。以後この担任のもと、井上靖はクラスメート（男子23名、女子21名在籍）とともに、家に帰ってからも学業に励んでいく。「卒業式は大正一〇年三月二二日に挙行され、靖は高等科第一学年の課程を無事終了した。……靖はこの段階で予定通り県立浜松中学校へと願書を提出し、三月五日と六日の両日、入学試験を受けて」首席で合格したのである⁽³¹⁾。

さらに、藤沢氏は、井上靖が在学した年度中途に校長の交代があったことを次のように記している。「津久井徳次郎校長の岡山師範学校長への転任式（大正一〇年二月九日）、佐々木松蔵新校長の就任式（二月一四日）、金沢龍平主事の大阪府池田師範学校長への転任式などを経験したことになるのだが」井上靖のそれらへの出欠のほどは明瞭ではないとしている⁽³²⁾。いずれにしても、浜松師範学校附属小学校に通った一年間は、彼が後に『幼き日のこと』で述懐しているように、人生の中で最も真剣に勉強に励んだ一年間であり、それが、旧制浜松中学校への首席合格、浜松中学校での級長、大正11（1922）年1月に行われた県下7中学校の優等生による学力奨励試験で第一位となる成績につながったのである。

（2）井上靖の浜松中学校時代

井上靖が旧制浜松中学校に入学したときには、父親は既に満州へ赴任し家族のもとを離れたため、浜松での一家そろっての生活は浜松師範学校附属小学校時代までであった。井上靖が旧制浜松中学校時代に書いた作文「秋の夜」が、大正10年12月に旧制の静岡県立浜松中学校校友会が発行した『校友会雑誌』第51号に掲載されている⁽³³⁾。「秋の夜」は、同誌に縦22字横15行

で書かれた詩であり、月と宵の明星が煌く下で家の裏にある小川の橋の上に佇んで見る天林寺の森がこんもりとして薄黒い中で夜露や虫の音を意識する様子が、透徹した文章で描写されている。浜松北高等学校同窓会館に保存されている同誌の他頁からは、井上靖の学んだ学級が1年1組であり級長を務めていたこと、浜名湖での水泳講習会に参加し級が5級から4級に上がったことなどが読み取れる⁽³⁴⁾。「秋の夜」は、曾根博義氏の井上靖作品年表の中で、最初にこの作品名が出てくる⁽³⁵⁾。

また、井上靖が旧制浜松中学校時代の状況を想起した作品に「過ぎ去りし日々」(佐伯彰一・松本健一監修 竹内清己編解説『作家の自伝18 井上靖』日本図書センター1994年)、旧制浜松中学校時代の出来事を題材に取り入れた作品に『孤猿』(文藝春秋1956年10月号、後に角川文庫)がある。藤沢全氏は、井上靖が浜松時代を人生の分岐点であったと顧みるほどに執着していながら、浜松時代に在学した三校(浜松尋常高等小学校、浜松師範学校附属小学校、浜松中学校)のいずれに対しても、自身の関係部分について作品上寡黙であった要因を、『孤猿』の一文を引用して、「友だちを作る時日もなかったし、もちろん教師と親しくなる余裕もなかった」というところであったと指摘している⁽³⁶⁾。確かに、井上靖の沼津時代については、彼の『夏草冬濤』をはじめ、様々なかたちで取り上げられることが多いのに比して、浜松時代のことが取り上げられることは少ない。これは、井上靖が浜松師範学校附属小学校に在学していたことが周知とならなかった理由その五といえる。

5 井上靖と森鷗外(補遺)

井上靖と森鷗外はともに医家の家系である。井上靖の曾祖父井上潔(1842~1901)は初代県立三島病院長を務め伊豆で名医として知られた。井上潔の妹すがの子が足立文太郎(1865~1945)で、帝国大学医科大学(現東京大学医学部)を卒業して、京都帝国大学医科大学教授となり軟部人類学創設者として高名である。足立文太郎は、井上靖の妻ふみの父である。井上靖は、足立文太郎との関係について、「京都大学医学部長をしていた解剖学者足立文太郎は潔の妹の子」であり、「私はこの足立文太郎の長女と結婚しているので、足立文太郎は私の岳父ということになる」と述べている⁽³⁷⁾。このことは、藤沢全氏による「井上靖年譜」に掲載されている井上家の家系⁽³⁸⁾により確認することができる。父井上隼雄(1880年5月25日~1959年5月10日)は、金沢医学専門学校を卒業し軍医として浜松衛戍病院長、台北衛戍病院長等を歴任し、昭和6年に軍医監に昇任して退職している。

一方、森鷗外(1862~1922)は、津和野藩の典医の家系に生まれ、第一大学区医学校予科に入学し同校が東京医学校から東京大学医学部となるに従いそこを卒業し、明治40(1907)年に軍医総監となっている。井上靖は、森鷗外の『舞姫』の現代語訳を行っており森鷗外と少なからぬ縁があることは井上靖自身も自覚していたと考えられる。こうした点に関連する事項として、井上靖の妻井上ふみが、「井上潔は、我が国初代軍医総監松本順の弟子で、森鷗外とは兄弟弟子の間柄であった。鷗外の方はのちに総監を継ぎ、潔は経済を受け持つために医者を開業したと、姑から聞いている」と、井上潔と森鷗外の関係について述べている⁽³⁹⁾。

井上靖の曾祖父井上潔の生涯については、藤沢全氏が詳述⁽⁴⁰⁾しているので、ここでは、主に井上靖の作品における記述を示すことにする。井上潔が松本良順(1832~1907)の弟子であることについては、井上靖が幾つかの作品の中で書いている。井上靖の『私の自己形成史』(『日本』連載1960年5月~11月、後に文庫本所収)によれば、曾祖父の井上潔は、「初代の軍医総

監を勤めた蘭疇松本順の門下として医学を学び、静岡藩掛川病院長、静岡県韮山医局長などを歴任した人物であり、しかも、「彼の妾であり、私が祖母と呼んでいた女性」と井上靖は、伊豆湯ヶ島で土蔵の中での共同生活を送ったのである⁽⁴¹⁾。曾祖父井上潔は、『しろばんば』の中で辰之助としても描かれている。

この女性と曾祖父井上潔とを登場させた作品として、『グウドル氏の手套』（『別冊文藝春秋』第37号、1953年12月、後に文庫本所収）がある。『グウドル氏の手套』では、長崎の料亭で「蘭疇・松本順の書がかかっていること」を見つけたこと、「私の曾祖父が松本順の門下であり、単に師弟の関係ばかりでなくそれ以上に深い交際を持っていた」こと、「幼い頃の私の心に、松本順という名前をこの世で最も尊敬すべき人物として吹き込んだのは、曾祖父潔の妾であったかの女である」ことなどが述べられている。なお、グウドル氏のモデルとなった実在の人物については、藤沢全氏が、Eliza Goodallという英国人女性であったことを検証している⁽⁴²⁾。

ここで、曾祖父井上潔の師である松本良順（1832～1907）は、長崎でオランダ医師ポンベに学び幕末から明治にかけて波瀾万丈の生涯を送った人物である。松本良順は、幕末下緒方洪庵の後を受け医学所の第3代頭取となり、明治政府下では初代軍医総監を務めている。医学所は、その後の変遷を経て、東京大学医学部となっていく。松本良順は、号を蘭疇（らんちゅう）と称し、明治以降は名を順と改めている。松本良順の生涯については、吉村昭が小説『暁の旅人』（2008年）で詳述している。また、司馬遼太郎の小説『胡蝶の夢』（1979年）でも扱われている。『胡蝶の夢』では、森鷗外が「明治二十年九月、カルルスルウエで赤十字社の第四回国際会議がひらかれた」⁽⁴³⁾際に、ポンベに会い、松本良順が健在なことと鷗外の父（森静泰、後に静男と改名）が松本良順の門下であることをポンベに伝えたということが述べられている。

前記したように、井上靖は、森鷗外の『舞姫』の現代語訳（森鷗外著・井上靖訳・山崎一穎監修『現代語訳 舞姫』ちくま文庫、2006年、現代語訳の部分は1982年に学習研究社より刊行）を行っているが、同書の解説において、山崎一穎氏が、明治20（1887）年の「カールスルーエでの万国赤十字社同盟の第四回国際総会」に通訳としてドイツ留学中の森鷗外が参加した状況について説明している⁽⁴⁴⁾。

これらの作品に書かれた内容のうち事実としての事項に基づけば、井上靖の曾祖父井上潔と森鷗外の父森静泰は、松本良順の門下から出たことになる。井上靖と松本良順の生没年を比較すると分かるように、井上靖は、松本良順の没年に生まれている。

以上の補遺として、森鷗外は、『渋江抽斎』（大正5（1916）年1月から5月まで『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に連載、後に文庫本化）の中で、明治8（1875）年に渋江抽斎の子渋江保が浜松師範学校教頭に任用されたことを記している⁽⁴⁵⁾。ただし、『渋江抽斎』の中の浜松師範学校は浜松瞬養学校を前身とするもので本稿で考察してきた浜松師範学校とは別の学校である。とはいえ、森鷗外が『渋江抽斎』を連載していた時期は、本稿で前述したように、大正4（1915）年4月に浜松の地に浜松師範学校が開設された年度に重なり、さらに大正5（1916）年4月にその附属小学校が開校された年度にも重なり、浜松師範学校および附属小学校の関係者の意気盛んな時期であった。浜松師範学校という同名同種の学校に関連する事柄が、同じ時期に、一方で森鷗外によって考証的に新聞連載され、一方で実際に開設されていたことは興味深く、この点を詳細に明らかにすることが今後の課題である。

6 本稿のまとめ

本稿では、附属浜松小学校に保管されている二つの石碑の由来を明らかにし関連する歴史のエピソードを探ること、石碑設置の時期に浜松師範学校附属小学校に井上靖が在学していたことが現在必ずしも周知ではないことからその理由を考察し井上靖に関わる当時の状況を明らかにすることを課題とした。考察の結果、次の点が明らかになった。

(1) 第一の石碑は、大正6（1917）年3月に設置されたものであり、「第一回講習科卒業生記念樹」の文字の左側に「大正六年三月」の文字が刻まれていたと考えられる。この石碑は、附属浜松小学校・中学校の卒業式で代々歌われ続けている「卒業式の歌」が最初に歌われた年に設置されたものである。

(2) 第二の石碑は、大正10（1921）年3月に設置されたものであり、石碑の欠落している部分には、「第五回」という文字が書かれていたと考えられる。第二の石碑が設置された時期に在籍した特記すべき人物として井上靖がいる。井上靖は、大正9（1920）年4月から大正10（1921）年3月まで、浜松師範学校附属小学校高等科で学んでいた。

(3) 井上靖には自伝風小説が複数ありながらそれらの作品の中で浜松師範学校附属小学校のことに触れていないこと、浜松市民が目にする出版物等においても井上靖の在学が看過されていること、浜松へ越した際の転入先が最初から浜松師範学校附属小学校ではなかったこと、高等科という現在にはない制度での在学であったこと、などが浜松師範学校附属小学校に在学していた事実への理解を妨げている。

(4) 井上靖が浜松師範学校附属小学校に通った一年間は、本当に真剣に勉強した時期であり、同時に家族そろって暮らした数少ない期間である。井上靖の作品では、『幼き日のこと』、『カマイタチ』、『帽子』などに、浜松師範学校附属小学校時代のことが書かれている。また、井上靖の曾祖父井上潔と森鷗外の父森静泰とともに松本良順の門下から出ている。

なお、本稿では、井上靖をはじめ一部の人物については、敬称を省かせていただいた。また、大正と昭和については原則として年号と西暦を併記し、平成については年号のみとした。文献の出版年等については、西暦を基本とした。本稿の主旨の一部は、下記で説明・発表した。

山崎保寿「附属小学校の歴史3つの謎」附属浜松小学校父母と教師の会主催平成23年度第1回「話の広場」、於附属浜松小学校体育館、2011年6月20日。

山崎保寿「附属学校長の経営に生かす歴史のエピソードの発掘—静岡大学教育学部附属浜松小学校を事例として—」第44回全国国立大学附属学校連盟校舎長会研究会（大会事務局：北海道教育大学函館分校附属函館中学校）、於函館市花びしホテル、2011年8月26日。

(注)

(1) 静岡県浜松師範学校の開校時には、本科40名、講習科36名が入学している。（静岡大学50周年記念誌編集委員会写真集小委員会編「静岡県浜松師範学校」『静岡大学の五十年 写真集』静岡大学、1999年、12頁）。

(2) 静岡県磐田地区の校歌を調べた鶴飼和吉によれば、浜松師範学校寮歌を作曲したのは佐々木英である（鶴飼和吉『校歌』2010年、81頁）。また、『東海展望』1968年4月号に掲載された「浜松師範学校物語①」32頁によれば、全寮制であった浜松師範学校寮歌の作詞は真田範衛、作曲は佐々木英である。

(3) 昭和18年4月1日施行師範教育令「第二条 師範学校ハ官立トス」による。

(4) 静岡大学50周年記念誌編集委員会通史編小委員会編『静岡大学の五十年 通史』静岡大学、

- 1999年、21～25頁、72～78頁。静岡大学教育学部同窓会会員名簿編集委員会編「静岡県教員養成施設・課程の沿革」『静岡大学教育学部同窓会会員名簿平成14年版』静岡大学教育学部同窓会、2002年、3頁。
- (5)大正5年4月発足時の学級数は、尋常科1学級(第4学年)、高等科1学級(第1学年)であり、尋常科と高等科を併置した尋常高等小学校である。本稿では呼称されてきた浜松師範学校附属小学校という名称を用いる。
- (6)附属浜松小学校校長室掲示の「静岡大学教育学部附属浜松小学校沿革」のほか、『静岡大学の五十年 通史』(1999年)、『会員名簿 平成23年』(2007年)に基づく。
- (7)2009年10月15日に山下陽平氏より聞き取り。
- (8)山崎保寿「卯年に願う新たな飛躍」静岡大学教育学部附属浜松小学校『学校だより 附属っ子』2011年1月7日発行。
- (9)『静岡大学教育学部同窓会会員名簿平成14年版』静岡大学教育学部同窓会、2002年、19頁。
- (10)「93年前植樹の記念碑発見」『静岡新聞』2010年2月26日。「シダレザクラなど植樹」『中日新聞』2010年2月26日。
- (11)静岡大学教育学部附属浜松小中学校同窓会編『小学校・中学校用 卒業式の歌に寄せて』1987年。
- (12)佐々木英の名は、「旧教官名簿 昭和24年3月以前」の「浜松師範学校(二師を含む)」の欄に見られる。(静岡大学教育学部同窓会会員名簿編集委員会編「静岡県教員養成施設・課程の沿革」『静岡大学教育学部同窓会会員名簿平成14年版』静岡大学教育学部同窓会、2002年、10頁)
- (13)大正8年3月23日に浜松師範学校附属小学校の第1回卒業式が挙行され、尋常科34名、高等科33名が卒業した。このときの尋常科卒業生の中では、現同窓会長山口治郎氏の父山口國一氏が第1回卒業生である。山口國一氏は、静岡大学教育学部附属浜松中学校校長(昭和33年4月～昭和36年3月)、静岡大学教育学部同窓会長(昭和49年5月～昭和63年5月)を務めた。
- (14)2010年4月29日に河鍋齧氏より聞き取り。
- (15)藤沢全『若き日の井上靖研究』三省堂、1993年。同書のほか、田村嘉勝『日本の作家100人 井上靖一人と文学』勉誠出版、2007年にも、井上靖が過ごした附属浜松小学校時代の状況が述べられている。
- (16)附属浜松小学校第29代校長を務める筆者は、井上靖の在学について、附属浜松小学校の関係者をはじめ、同窓会、後援会、当校が主催する教育研究会などの機会に尋ねたが知る人はいなかった。
- (17)自伝的小説と自伝風小説という言葉について、井上靖には『井上靖自伝的小説集』(学習研究社、1985年)という名称の小説集が出版されているが、そのあとがきのなかで、井上靖が、『しろばんば』、『夏草冬濤』、『北の海』の三作を自伝風小説と呼んでいることに倣い、自伝風小説という言葉を用いた。
- (18)井上靖「『井上靖小説全集』自作解題 第六巻」司馬遼太郎・大岡信・大江健三郎監修『井上靖全集』別巻、2000年、34頁。
- (19)浜松市制百周年記念誌『ももとせ』浜松市、2011年、63頁。
- (20)静岡第二師範学校附属国民小学校は、昭和20(1945)年7月29日に艦砲射撃により、体育

館・倉庫・第2棟・第3棟を全半焼された（静岡大学教育学部附属浜松小中学校同窓会編『会員名簿 平成23年』静岡大学教育学部附属浜松小中学校同窓会、2007年、5頁）。附属浜松小学校校長室に掲示されている「静岡大学教育学部附属浜松小学校沿革」によると、静岡第二師範学校も同年7月に戦災を受け破壊された。

- (21) 藤沢全編「井上靖年譜」司馬遼太郎・大岡信・大江健三郎監修『井上靖全集』別巻、2000年、715～764頁。
- (22) 井上靖が戸籍上の祖母かのと土蔵生活を送った伊豆湯ヶ島時代のことは、『しろばんば』などの作品に見られる他、井上靖文学散歩研究会編『洪作少年の歩いた道—井上靖「しろばんば」・「夏草冬濤」の舞台—』（静岡県東部行政センター、2005年）等に示されている。
- (23) 浜松尋常高等小学校（現浜松市立元城小学校）の校歌は、浜松師範学校の教師真田範衛が作詞、佐々木英が作曲したものである（浜松市立元城小学校作成資料『元城小学校校歌』（印刷年不詳）による）。また、同校の卒業式でも、「卒業式の歌」が歌われ続けている。
- (24) 井上靖「帽子」司馬遼太郎・大岡信・大江健三郎監修『井上靖全集』第7巻、1995年、153～154頁。
- (25) 井上靖の沼津時代のことは、藤沢全『若き日の井上靖研究』（三省堂、1993年）の他に、勝呂奏編『井上靖と沼津』（沼津文学祭開催実行委員会、2005年）に詳しい。
- (26) 井上靖は、『しろばんば』、『夏草冬濤』、『北の湖』などを自伝風小説と呼び、『わが母の記』、『幼き日のこと』などを「ある時期の私と私の周囲を正確に描こうとした文学的記録」としている。（井上靖『井上靖自伝的小説集』内容見本 著者のことば」司馬遼太郎・大岡信・大江健三郎監修『井上靖全集』別巻、2000年、126頁）
- (27) 工藤茂「詩『カマイタチ』について」『井上靖研究』第2号、2003年、12～15頁。
- (28) 菅原五十一『遠州文学散歩 復刻増補版』浜名湖出版、1990年、16頁。
- (29) 藤澤全『詩人・井上靖 若き日の叙情と文学の原点』角川学芸出版、2010年、102頁。
- (30) 井上靖、前掲注（24）、153～154頁。
- (31) 藤沢全、前掲注（15）、259～262頁。
- (32) 藤沢全、同上書、261頁。なお、金沢龍平については、『静岡大学二十五年史』（442頁）では金澤龍平、静岡大学教育学部附属浜松小中学校同窓会編『会員名簿 平成23年』（7頁）では曾澤龍平、同11頁では曾沢龍平、「浜松師範学校物語②」（『東海展望』1968年6月号56頁）では会沢竜平、附属浜松小学校校長室掲示の「静岡大学教育学部附属浜松小学校沿革」では會沢龍平となっている。会の旧字体會が使われたためと思われる。
- (33) 静岡県立浜松中学校校友会『校友会雑誌』第51号、1921年、55～56頁。
- (34) 浜松北高等学校同窓会館で平成23年6月3日に確認。
- (35) 曾根博義編「井上靖作品年表」司馬遼太郎・大岡信・大江健三郎監修『井上靖全集』別巻、2000年、767頁。
- (36) 藤沢全、前掲注（15）、279～280頁。
- (37) 井上靖「過ぎ去りし日々」佐伯彰一・松本健一監修、竹内清己編解説『作家の自伝18 井上靖』日本図書センター、1994年、5頁。
- (38) 藤沢全編、前掲注（21）、718～719頁。
- (39) 井上ふみ「わが家の第一祖」司馬遼太郎・大岡信・大江健三郎監修『井上靖全集』第二巻月報、新潮社、1995年6月、1頁。

- (40) 藤沢全、前掲注(15)、17～51頁。
- (41) 井上靖「私の自己形成史」井上靖『幼き日のこと・青春放浪』新潮文庫、1976年所収、227～228頁。
- (42) 藤沢全「『グウドル氏の手套』考」藤沢全編『井上靖研究』創刊号、2002年、26～35頁。
藤沢全「『グウドル氏の手套』のモデル—長崎に眠る英国女性—」『井上靖—グローバルな認識—』大空社、2005年、169～174頁。
- (43) 司馬遼太郎『胡蝶の夢』新潮文庫、1979年、9～10頁。
- (44) 山崎一穎「解説」森鷗外著・井上靖訳・山崎一穎監修『現代語訳 舞姫』ちくま文庫、2006年、108～111頁。
- (45) 森鷗外『渋江抽斎』(改版第6刷)岩波文庫、2005年、286～289頁。渋江抽斎の子渋江保と浜松瞬養学校および浜松師範学校との関係については、常葉学園大学学長角替弘志氏(附属浜松小学校第21代校長、在任期間:1985年4月～1988年3月)からご教授いただいた。